

平成 22 年度地域学歴史文化研究センター個人評価報告書

1. 個人評価の実施状況

1) 対象教員数, 実施者数, 実施率

対象教員数 (人)	実施者数 (人)	実施率 (%)
2 (教授 1、准教授 1)	2	100

2) 教員個人評価組織と実施概要

評価組織	地域学歴史文化研究センター 評価委員会
構成	半田 駿 (農学部教授/センター長) 重藤輝行 (文化教育学部講師/センター考古学研究部門長) 白石良夫 (文化教育学部教授/センター国文・文献学研究部門長) 鬼嶋淳 (文化教育学部准教授/センター併任准教授)

実施内容と方法：

- ①センター全教員を対象とした。
- ②地域学歴史文化研究センター個人評価実施基準、同指針に基づき、評価項目とそれらの重みを各自が設定。
- ③実施対象期間は平成 22 年度とし、活動実績の様式に活動実績を記入し (添付資料で明らかな場合は必ずしも記入を要しない)、それに基づき自己点検・評価を行い提出。
- ④評価委員会を平成 23 年 10 月 3 日に開催し (出席者：半田、重藤、白石、山本)、提出された評価資料をすべて点検・評価し、委員会の評価点、コメントを集約。センター評価委員会規程に従えば、青木歳幸副センター長/洋学・思想史研究部門長、伊藤昭弘地域史・史料学研究部門長も委員に含まれるが、両人は評価の対象であるため今回は委員会から外し、かわって鬼嶋淳文化教育学部准教授/センター併任准教授を加えた。

添付資料：

- ①地域学歴史文化研究センター個人評価実施基準
- ②地域学歴史文化研究センター個人評価実施指針
- ③個人目標申告書 (様式 1)、活動実績報告書 (様式 2)、自己点検・評価書 (様式 3)・評価結果 (様式 4)

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

① 著書・論文

- ・専任教員2名ともそれぞれ地域学創出に関わる論文をまとめ、紀要等で公表した。

② 資料整理・目録づくり・展示等

- ・それぞれの部門長として、地域資料の整理、目録づくりをすすめた。
- ・小城市との交流事業企画展については、専任教員2名が役割を補完し合って大きな成果をあげた。

③ 研究成果の公開・刊行

- ・小城市との共同研究の成果を展示図録として刊行した。
- ・センターの研究紀要5号を刊行し、研究成果を公表した。
- ・学内研究プロジェクト「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究」の報告書を刊行した。

④ 各種研究費（研究助成等）応募

- ・1名が基盤研究（S）の研究分担者、1名が基盤研究（B）の研究分担者として科研費助成を全員受けている。
- ・佐賀大学大学改革推進経費の交付をうけた」学内研究プロジェクト「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究」が最終年度を迎え、成果として論集『佐賀学』を編集・刊行した。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均90%であった。各評価項目ともおおむね目標を達成している。
- ・外部資金は2名全員が獲得している。さらなる外部資金獲得に挑戦する予定である。

3) 研究の領域における部局等の自己点検評価

- ・少人数でありながら十分な業績を達成している。

(2) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

① 教養教育

- ・全員が教養教育科目、文化教育学部の科目を担当した。

② シラバス作成・公開

- ・全員がシラバスを作成し、公開し、ほぼそれにそった授業展開ができた。

③教育方法の改善

- ・それぞれパワーポイントやプリント、小テスト等の工夫に取り組んでいた。

2)教育の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 80%であった。
- ・パワーポイントやプリント配布等、教育方法の工夫改善に熱心に取り組み評価できる。
- ・教養教育の演習的科目と大人数の講義的科目にそれぞれ積極的に取り組み、教員評価アンケートも良好であった。

3)教育の領域における部局等の自己点検評価

- ・本センターは研究センターであるが、本学の理念・目的のひとつである「豊かな教養と深い専門性を生かして社会で自立できる個人の育成」に貢献すべく、教養教育に積極的に取り組んでいる。

(3) 社会貢献の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

①自治体・学外研究者との共同研究、展示等

- ・小城市との交流事業企画展「小城の教育と地域社会」を役割分担しつつ共同研究により展示を実施した。
- ・それぞれ自治体史編纂にかかわった。

②自治体・学会等の役員・委員など

- ・佐賀県・佐賀市との文化財関係委員活動が活発だった。

③公開講座・講演等

- ・全員が公開講座の企画・運営・講演などに貢献した。
- ・研究会での研究発表、学外からの依頼講演などを積極的に担当した。

④研究集会の開催

- ・「第3回地域学シンポジウム」を主催した。

2)社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 90%であった。
- ・公開講座をふくめ、地域貢献・社会貢献への十分な活動がみられた。

3)社会貢献の領域における部局等の自己点検評価

- ・どの項目も十分な活動実績がみられたが、とくに展示を通しての社会貢献度は高く評価されている。
- ・産学官 6 者連携事業「佐賀県歴史データベース構築事業」をすすめ、データベースの公開

にこぎつけた。

- ・ 少人数の研究センターでありながら、全員が社会貢献領域の活発な活動を展開している。

(4) 組織運営の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

- ・ センターの運営に関しては、全員がセンター会議、運営委員会に参加し、センター各部門の運営にも責任をもって当たっており、それぞれが業務を補完し合って協力し、個人ごとの目標達成度は高い。

2) 組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・ 自己評価（達成率）は平均 90%であった。
- ・ 達成率が高いのは、センター設立から 5 年目にあたり、センター長のもとで、各自が組織運営に十分に努力してきたからである。
- ・ センターの時限最終年度を迎え、外部評価を実施し、外部評価報告書を刊行した。

3) 組織運営の領域における部局等の自己点検評価

- ・ 専任教員 2 名という極めて少人数の組織であり、全員が重要な業務分担をして運営にあっている。過重な負担がやや認められるものの、協力しあって、良好に運営されている。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合的な集計・分析結果と部局等の自己点検評価

	平均
研究	92.5
教育	87.5
社会貢献	90.0
組織運営	92.5
平均	90.6

- ・ 各教員の総合的な評価点（達成率）は 90.6%である。
- ・ 個々の教員は研究・教育など積極的に活動して成果を挙げ、それを社会貢献にも反映させている。
- ・ 少人数であるため、各々自覚して組織運営に携わっている。

2) 個人評価に関する構成員からの意見を調査している場合は、まとめたものを添付

・特に意見はなかった。

3) 次年度の個人評価実施に向けての改善案が策定されていれば、それも記載

・特に意見はなかった。

4) 段階評価試行結果の検討（意義、有効性、活用方法などに関して）及びこれに代わる総合的活動状況評価の集計・分析方法の提案など

・特になし。

以上